

食と農と村を考える情報誌

URUSATO YUME TOYAMA

ふるさと

夢とやま

NO.42

ふるさとウォッチング.1 / 魚津市 小菅沼・ヤギの杜
里山の知恵や暮らしで地域活性化

ふるさとウォッチング.2 / 五箇山なご畑塾
悠久の里の暮らしと文化を体感する

とやま農山漁村インターンシップ / 富山市山田
リモートで拓く新たな都市農村交流のかたち

中山間地域チャレンジ支援事業 / 神通峡ふるさと創生物語
人も地域も元気にな～れ!

魅力たっぷり!とやまの6次産業化 / Lifetime, オカジマ農産加工部
くつろぎの空間でこだわりの料理を / 農家パティシエならではの絶品“農家のおやつ”

カモ親子の農村日記
先人の知恵と努力が息づく歴史ある用水 戸久用水 (小矢部市)

トピックス
日本の原風景 棚田を未来へ継承するために
中山間地域の再生は住民の手で
とやま帰農塾2021 / 第10回「とやまの農山村写真展」

Furusato Watching ふるさとウォッチング

小菅沼・ヤギの杜



小菅沼・ヤギの杜 (魚津市) 里山の知恵や暮らしで地域活性化

魚津市街地と富山湾を見下ろす里山にある小菅沼集落。ここで営まれていた中山間地域の農村ならではの知恵や暮らしを伝承し、様々な活動を通じて発信しているのが「小菅沼ヤギの杜」です。イベントへの参加者は誰もがリピーターになってしまう、そんな人々を魅了してやまないヤギの杜の活動についてご紹介します。

ヤギの杜の始まり

小菅沼・ヤギの杜は、集落外の非農家を含めた12名の有志で平成20年に結成されました。当時、畦畔の除草作業や鳥獣被害に悩まされていた集落が、ヤギを除草などと農作業のパートナーとして起用したことが名前の由来。また「杜」という字には、人々が長い年月をかけて一から作り上げてきた場所、という思いが込められています。

人々のつながりが生まれる場所

ヤギの杜がまず取り組んだのが耕作放棄地の解消です。再び命が吹き込まれた田んぼは、県内でも有名になった「稲作アート」や「コキアのほうき作り」などのユニークな活動の場となりました。今や季節に応じて開催されるイベントには県内外から50人程が参加し、いつも大盛況。代表の金森喜保さんは「休む暇がなく大変で手が回らんわ」と困ったような笑みを見せますが、その目は生き生きと嬉しそうです。



みんなでほうき作り!!

生み出される商品、受け継がれる商品

さて、初めは除草のパートナーに過ぎなかったヤギですが、今や小菅沼のアイドル。この地を訪れる子連れのファミリーや老人ホームの方々の心を和ませています。そんな多種多様なイベントと人懐っこいヤギたちの力で交流が生まれ、「農村の暮らしの発信拠点」として地域の活性化につながっています。



金森さんが大好き!!

活動が創り出した新たな景観

小菅沼に連なるたくさんのお田舎を、美しく彩るため、ヤギの杜が平成28年から取り組んでいるのが「コキアの灯りプロジェクト」です。秋になると、棚田の淵に沿うように均一に植えられたコキアが赤く染まり、それはまるでスポットライトで照らしたかのような美しさ。今では県を代表する棚田景観の1つです。



赤く染まったコキア



受け継がれる漬物の味!

「古代米」はじめとした人気商品の数々

まだまだ夢の途中

平成25年には「いろんな人とコラボレーションしたい」との思いから「コラボルーム」を新設。また令和2年には、これまでの活動が認められ、国の「第7回ディスカバー農・山・漁村の宝」に選定されました。結成時に抱いていた「高齢者とともに地域を元気に」との思いは、時代とともに「農村の暮らしの発信」へと変化。活動の幅はどんどん広がり、中山間地域の活性化に取り組み県内でも名の知れた集落へと成長しました。その活動は共感を呼び、今では移住の問い合わせもあるそうです。「いずれは宿泊施設も兼ねたシェアハウスも作りたいな。まだまだ夢物語だけど」とほほ笑む金森さん。熱心な活動ぶり、そして思いを一つに支えあうスタッフの皆さんを見ると、夢が叶う日はそう遠くないかもしれません。

皆さんもヤギの杜に遊びに来ませんか? スタッフ一同



灰と土を動き込む耕起体験

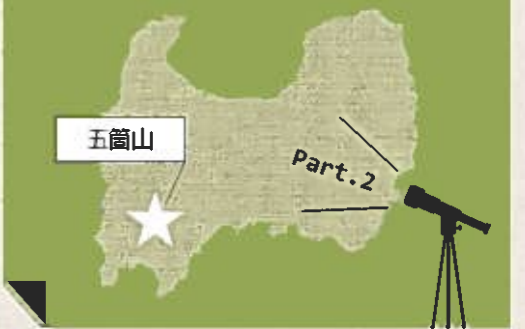


猛暑の中のなぎ畑



Furusato Watching ふるさとウォッチング

五箇山なぎ畑塾



悠久の里の暮らしと文化を体感する ～五箇山なぎ畑塾～

「とやま婦農塾」は、田舎暮らし体験を移住・定住の促進や関係人口の構築につなげようと、2005年から県内各地で開催されています。今年は新型コロナの影響で、いくつかの塾が中止となる中、『五箇山なぎ畑塾』は交流に前向きな塾長の熱意にも後押しされ、首都圏等から14名もの参加のもと、8月24日から26日にかけて開催。感染防止のための様々な制約の中で、参加者たちは五箇山にどんな『ご縁』を感じたのでしょうか。

炎天下のなぎ畑体験 ～先人の汗を知る～

2日目は、この塾のメインである『なぎ畑体験』です。なぎ畑とは、土の表面の雑草などを焼き、灰で土壌を中和することで肥料や除草剤に頼らず作物を育てる伝統農法。積み上げた枝に火を付け、それらを長い鎌のような道具で転がしながら地面を焼いていきます。真夏の日差しに炎の熱さが加わり、皆さん汗だく。その後、土に灰を混ぜ込みながら耕し、五箇山の在来種「赤かぶ」の種をまきます。

移住者のお話し ～五箇山との「ご縁」を聴く～

この夜の締めくくりは、五箇山に移住された坂口さんご夫妻との座談会です。将来田舎暮らしを考えている参加者もおられ、いろんな質問が飛び交いました。特に、「移住して心細くなかったか」との問いに、「野菜を譲ってくれたり、住民の皆さんにはよくしてもらい、安心感から都会に帰りたと思わなかった」と答えておられたのが印象的でした。

伝統の料理と民謡 ～伝統の食と舞に癒される～

伝統の報恩講料理



この日の夕食の「報恩講料理」は、浄土真宗の仏事の際に出される精進料理です。肉や魚は一切使われていませんが、朱色の器に盛られた五箇山豆腐や地物の野菜料理の素朴な味に一同ほっこり。夕食後は、日本最古の民謡とされる『きりぎり節』を見学。茅葺き家屋を背景に、伝統衣装を身にまとった踊り手が「ささら」を鳴らしながら踊る優雅な姿に、皆さん魅了された様子でした。

集落散策とささら作り ～合掌の里の歴史にふれる～

初日は、世界遺産の菅沼集落散策からスタート。塾長の西敬一さんからは、なぜ合掌造り家屋が豪雪に耐えられるのか、なぜ江戸時代に糞や煙硝づくりなどが栄えたのか、屋根材の菅はどうやって確保されるのかなど様々な説明がありました。風雪に耐えてきた家屋を前にしての解説は臨場感抜群で、参加者たちは真剣に耳を傾けていました。

その夜は、五箇山民謡『きりぎり節』に用いる伝統楽器「ささら」づくりに挑戦です。楽器を作るという珍しい体験に心を躍らせつつ、煩惱の数と同じ108枚の板を編み込む作業に没頭。完成後はさっそく音を出し、出来ばえを確かめていました。



「ささら」の編み込み作業

自分のささらを早速鳴らしてみる参加者



菅沼集落の散策

五箇山豆腐作り ～伝統の恵みを味わう～

最終日は、五箇山豆腐作りに挑戦です。この豆腐は縄で縛って持ち運べるほど固く、それを生み出すのは漬物石で押し込んで水分を抜く工程です。出来立ての豆腐は温かく、大豆の風味も市販のものとは比較になりません。打ちたての蕎麦も振る舞われ、皆さん「美味しいー」と満足げでした。



より硬い豆腐になるよう押し込む参加者も

今回は、感染防止のため交流会を中止するなど様々な制約がありました。お酒がない分真剣に話を聞くことができ、自然の静けさも体感できた」との声もあり、こんな時だからこそ気付けた五箇山の良さがありました。

閉講式で、参加者からはこの時期に受け入れてくれたことへの感謝の気持ちや、塾長からは交流の手を止めないという決意と、何度でも五箇山に来てほしいとの期待の気持ちなどが伝えられました。「ここで結ばれた『ご縁』は、ずっと続くに違いありません。」

2 日目
若者の視点から提案発表
 1週間後の提案発表の日、再びモニター上に学生たちが集合。空き家の活用方法としては、「大学サークル等の合宿などに需要が見込める」、「自然環境を生かしてワーケーションの場」といった意見が出されました。中でも「空き家の前の空き地を畑にして、そこで育てた野菜や野草茶を楽しむカフェに」という案は、居住という枠に捉われない面白い案として目を引きま

2 日目
若者の視点から提案発表



**参加者に
 事前に送付された
 山田の特産品**

▲大人気のリンゴジャム

▲新米「山田のこっつお米」

▲商品化を目指す野草茶

**学生からの
 提案**



また、直売所の商品については、「野草茶をティーバッグに見栄えをよくする。アイスやクッキーに混ぜて商品化する」、「リンゴジャムはパン屋やカフェとコラボして売り出す」といった若者ならではの提案がありました。今回のリモート交流をきっかけに山田地域への関心を高めた学生たちは、この地を訪れてみたいとの思いを強くしたことで

立山塾
 立山塾には、関東を中心に6名が参加。陶芸体験施設の陶芸館と結んで、あらかじめ送付したキットで小皿を製作した後、銘酒「満寿泉」を作陶家 釋永由紀 夫氏監修の片口で注ぎ、「リモート飲み」しながら塾長の島雅啓さんと語り合いました。

南砺塾
 オンライン帰農塾で体験&交流
 県内各地で毎年開催している田舎暮らし体験講座「とやま帰農塾」ですが、令和2年度は「リアル版」に加え「リモート版」を南砺市と立山町で開催しました。



▲自宅の部屋から指導する杉森さん



▲完成した
 始めの飾り



▲オンラインで陶芸体験



新型コロナウイルスの感染拡大で都市部の過密化の問題がクローズアップされ、農山漁村への関心が高まっている一方、都市圏と地方との往来自粛により、互いの交流が困難になっています。そこで県では、交流の継続を目的に、初の試みとしてリモートによる交流事業を実施しました。

リモートで拓く新たな都市農村交流のかたち

都市部の学生が地域に入り、地域課題の解決策を提案する「とやま農山漁村インターンシップ事業」。令和2年度は、富山市山田地域で開催する予定でしたが、コロナ禍で現地開催を断念し、12月5日・12日にリモートでの開催となりました。

本来は1週間ほど現地に滞在し、参加者が様々な体験をしながら課題に向き合いますが、WEB版では1日目に地域からテーマを投げかけ、1週間後に参加者から提案発表してもらう方法をとりました。

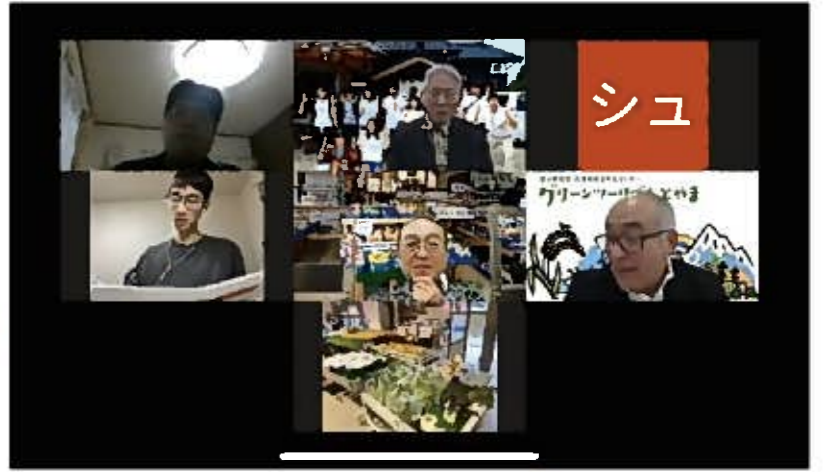
1 日目

ライブ配信で現状を伝える

参加したのは関東圏の大学生3名。山田地域からは、「空き家の活用」と「直売施設「山田の案山子」の展開」の2つのテーマが示されました。参加者とリモートで結び、山田地区ふるさとづくり推進協議会会長の吉田良雄さんが空き家の現状を説明した後、実際に空き家からライブ中継。「窓の外の景色を見たい」といったリクエストに即時に応えるなど、ライブの強みを最大限に生かしました。続いて、NPO法人山田の案山子理事長の若林秀美さんが、直売所の商品を売り込む方策の検討を要望。ここでも直売所からライブ中継したほか、参加者には事前に棚田米やリンゴジャム、商品化を目指す野草茶などを送付し、商品を直に手に取って味わってもらいました。



▲学生の提案発表に聞き入る古田さん(手前)と若林さん(奥)



▲山田の案山子からライブ中継



住民数より野生動物の数が多く農作物被害に悩む神通峡地域では、サルやイノシシ等に住民とヤギとがコラボレーションして対抗しています。ヤギの放牧により『カウベルト』ならぬ『ヤギベルト』を作り、耕作放棄地の復元にチャレンジ。ヤギの放牧地の近くでは、獣も警戒して近づかなくなったところもあるようです。

また、家に閉じこもりがちなお年寄りがヤギの前で井戸端会議を始めたり、ヤギを見に孫達が遊び

ヤギとのコラボで「らっきょうの里」の復活を！



▲「大乗悟山」遊歩道の案内板制作



▲「常虹の滝」周辺の整備

か、かつて涼感スポットとして人気を集めた『常虹の滝』の再生にも努めています。おもてなしの心を持って行うこうした取り組みは、地域の元気を生み出しています。



中山間地域チャレンジ支援事業の紹介

神通峡ふるさと創生物語

人も地域も

元気になくれ！

岐阜県境に程近い富山市南部には位置し、神通川上流を挟んで旧細入村と旧大沢野町下々地区からなる神通峡地域。近年、高齢化や鳥獣による農作物被害の深刻化で、地域の核となる農業の継続が困難となり、地域活力が失われようとしています。

そこで、平成26年、有志により「神通峡ふるさと創生物語」を結成。令和元年度からは富山県の「中山間地域チャレンジ支援事業」を活用し、その名の通り、物語を書き綴るよう一歩ずつ歩みを進めています。



富山市神通峡地域

観光スポットの再生で地域を元気に！

観光スポットを整備し、魅力を高めていくことは、地域内外の交流にもつながります。ふるさと創生物語では、地元の森林ボランティアしゅんゆう倶楽部の協力のもと、昭和天皇のお手植え杉周辺ややま白山の一つ大乗悟山の遊歩道、割山森林公園天湖森周辺の整備に取り組むほ



▲神通若小の児童と「らっきょう」の植え付け体験

に来る機会が増えたりと、お年寄りを元気にする思わぬ効果もありました。

鳥獣被害が比較的少ないとされる「らっきょう」の栽培から加工・販売にいたる6次産業化にも取り組んでいます。元々らっきょうの産地として知られた細入地域ですが、生産農家が高齢化により年々減少。ヤギベルトと合わせて取り組むことで「らっきょうの里」の復活を目指しています。



▲孫が来てくれるうれしいね！



▲これを挙げるからプルから冊を守ってね！

「ふるさと創生物語」では、年に数回「ふるさと創生物語」を語り継ぐ会を開催。子どもたちがお年寄りから昔の暮らしぶりを聞いたり、昔の遊びを一緒に楽しんだり、冬には餅つき

ふるさとを語り継ぐ



かつての賑わいを失った猪谷駅前商店街の復活に向けた活動にも力を入れています。

その一つが散策マップづくり。かつて飛騨街道にあった関所の面影を伝える「猪谷関所館」や円空上人が彫ったとされる仏像を模した「現代版円空」など、商店街に点在するスポットを紹介し、回遊してもらうのが目的です。

また、住民が家庭で出た野菜くずをヤギの餌として提供することに押印してもらえらるスタンプカードもユニークなアイデア。スタンプが貯まれば商品券と引き換えてもらえる仕組みで、生ごみ削減と商店街応援の一石二鳥を狙っています。



▲スタンプカードで地域内の資源や営みの循環

神通峡地域の物語はまだまだ続く

ふるさと創生物語では、こうした活動や暮らしの情報をブログやフェイスブックなどSNSで発信するほか、『神通峡新聞』を発刊し、図書館や観光施設に置いて積極的なPRを図っています。

地域探訪や農作業体験等の企画に参加した人々や、かつてこの地で育てられた人々とその家族が『神通峡地域の応援団』として関わり続けてくれること、そしてゆくゆくは地域の空き家などに移住してくれることを願いつつ、ふるさと創生物語はストーリーを紡ぎ続けます。



●ボランティアガイドによる「ふるさと探訪」



●「ふるさとを語り継ぐ会」で昔の暮らしの話を聞く



●もちのつきあがりを楽しみ！



▶中山間地域チャレンジ支援事業とは…。中山間地域の集落と企業・団体等が連携して取り組む農山村を元気にする活動に対して、県が支援する事業です。

●地元の小中学生と「天湖森」の立木整備



家族でサトイモを収穫

Okajima Farm 加工部

Okajima Farm

新オカジマ農産 加工部
代表 岡島美由紀

高岡市今泉152
電話/0766-36-2181
FAX/0766-36-0700
Instagram/@m.okjnousan
販売場所/JA高岡あぐりっち佐野店、道の駅雨晴 ほか

農家パティシエならではの
絶品“農家のおやつ”
～オカジマ農産加工部～

高岡市中田地区にある新オカジマ農産は、米や大麦、里芋を栽培する家族経営の農業法人。代表の岡島正晃さんの妻、美由紀さんは、元パティシエという異色の経歴の持ち主です。家族で農作業に従事する中で農業継承への決意を固めた美由紀さんは、とやま農業未来カレッジに入学し、栽培・加工技術から流通販売のノウハウにいたるまで一から習得。また、農家カフェでの実習など様々な経験を積むうち、「自社の農作物を使って自分らしい商品を生み出したい」との思いが募り、パティシエの経験を生かして商品開発へと踏み出しました。

そして誕生したのが「里芋チーズケーキ」。生クリームと卵の替わりに里芋を用いるという農家ならではの発想から生まれたこの商品は、里芋の粘りがもたらすトロリとした食感がたまりません。甘さひかえめで体にも優しいとあって、口コミでたちまち人気スイーツに。今では冷凍保存の技術も確立し、通年販売が可能となりました。ブルーベリー味やユズ味など6種のフレーバーを揃え、ギフトとして買い求めるお客さんも増えている



新商品の玄米パン

「ですよ」とにっこり。他にも玄米パンや野菜入りクッキーなど新商品を次々に生み出している美由紀さんですが、外装には手づくりの消しゴムハンコでホッカリ感を演出。また、なるべく自社産の材料を用いるのはもちろん、小麦粉「ユキチカラ」やリンゴなど高岡産の食材にこだわること、地域とのつながりも大切にしています。これらの商品は、地元のJAや道の駅で購入可能(※)。農家パティシエだからこそ生み出した「農家のおやつ」をぜひご賞味ください。

人気のチーズケーキセット



クッキー詰め合わせ

代表の岡島美由紀さん

(※)販売場所/JA高岡あぐりっち佐野店、道の駅雨晴 ほか



新オカジマ農産 (高岡市今泉)

Lifetime (中新川郡立山町)

赤茶色の外壁が目印です☆

Lifetime

立山町前沢3082-12 電話/076-461-7411
Instagram/@lifetime_tateyama
Facebook/https://www.facebook.com/LifetimeTATEYAMA/
営業時間/ランチタイム:火~金 11:30~14:00(テイクアウト含む)
ディナー:木~土 18:00~22:00
カフェ:6月~8月の木~金 13:00~16:00
アクセス/富山地方鉄道立山線 榎町駅から徒歩10分

魅力たっぷり!

とやまの
6次産業化

くつろぎの空間で
こだわりの料理を
～Lifetime～

立山町役場から南に徒歩10分ほどの所に、一際目を引く赤茶色の農家レストラン「Lifetime」があります。肉牛農家でもあるオーナーの柏さんご夫妻が「自分たちももう一度来たいと思える場所」をコンセプトに2017年にオープン。開放的な店内には、温かみのある木製テーブルが配され、女子会や友人との食事はもちろん、ファミリーにも安心な小上がりも備えています。色とりどりのサラダやピザ、ドリアなど豊富なメニューには、地産の食材がふんだんに使われているほか、女性客を意識し栄養バランスを考えた一皿や、思わず目を奪われるお洒落な盛り付けにもこだわりが感じられます。中でもランチタイムに5割のお客さんが注文するほど大人気なのが、「立山放牧牛」を使用したローストビーフ。赤身が多くヘルシーでさっぱりとしただけるうえ、旨みもギュッと凝縮した逸品です。立山放牧牛は、自家農場でストレスなくのびのびと飼育された出産後の牝牛で、柏さんご夫妻によれば、「この牛の美味しさをぜひ

知ってもらいたい」との思いが、このレストランを始めた大きな理由だそうです。「作った料理でお客様が笑顔になってくれれば、それが一番嬉しいですね」と目を細めるご主人。さて「店名の「Lifetime」とは「生涯」という意味。「地元の方々の生活の一部となって、未永く時間を共有したい」との願いが込められた店名のとおり、これからも出会いや人とのつながりを大切にしていきたい、と柏さんご夫妻は言います。日々の慌ただしさを忘れさせる癒しの空間で、オーナーご夫妻の地元愛が詰まった料理の数々を堪能してみたいはいかがでしょうか。



人気のローストビーフランチ



Lifetimeのスタッフのみなさん

ファミリーにもうれしい小上がり席



途中には急峻な山腹を通過する場所もあり、難工事であったことがうかがえます。また、精密な測量機器のない時代にもかかわらず、わずかに3000分の1の勾配の水路を築き上げた当時の技術の高さには驚かされます。

天和元年(1681年)、十村役は加賀藩主に戸久用水の工事を請願し、許可を得て用水工事に着手。この工事により、渋江川上流(現在の南砺市人母地内)に堅固な木製の堰堤が築造され、そこから山腹や谷間を延々と縫い、下流の戸久村に至る3里8町(約12.8km)に及ぶ水路が建設されました。

難工事を経て完成した用水路



▲戸久用水の取り入れ箇所(南砺市人母地内渋江川上流)

この難工事は、十数年もの歳月を経て完成しましたが、要した経費は、玄米5斗入の米俵(※)を用水路総延長に並べた数(約3万俵)に匹敵するほど巨額であったと伝えられています。

※当時の1俵の量は土地ごとに異なり、幕府では1俵=3.5斗、加賀藩では1俵=5斗、現在では1俵=4斗とされる。

維持管理の変遷

戸久用水の開設当初は、十村役と4名の代表者が協議して維持管理の全てを担っていましたが、明治時代に入ってから石高10石以上の地主の集まりによる運営へと変わり、昭和3年には「戸久第一耕地整理組合」が設立され、戦後までこの組織により維持管理が行われました。

その後、戦後の農地改革により地主制度から自作農へ移り変わったことから、昭和23年には自作農家によって「水利委員会」が構成され、これが現在の維持管理組織の母体となっています。

昭和46年には県営ほ場整備事業の計画により、戸久用水のやや下流から取水していた安養寺用水との統合が図られ、戸久用水の灌漑面積は150ha超となりました。これに併せ、受益地10集落で「統合戸久用水水利委員会」を設立し、今日の維持管理に至っています。

ふるさとを創る
土地改良施設を水辺から
眺めたお話

カモ親子の農村日記

先人の知恵と努力が息づく歴史ある用水

戸久用水(小矢部市)

戸久用水は、小矢部川水系一級河川の渋江川から南砺市人母地内で取水され、小矢部市の南部丘陵地帯を西から東に流れる延長約12kmの用水路で、その灌漑面積は約165haに及びます。丘陵地を貫通し、山腹斜面を縫うように流れるこの用水路の歴史は古く、330年ほど前に遡ります。

戸久新村の開拓と灌漑用水の開削

藩政時代の延宝元年(1673年)、二人の十村役(※)が加賀前田藩からの帰途、加賀と越中の国境にある俱利伽羅峠で休息をとっていたときのこと。眼下に広がる砺波平野を眺め、南方の丘陵地に開墾に適した広大な土地があることに気付く。「あそこは良い土地だ。近くを流れる渋江川の上流をせき止め、灌漑水を取り入れて開墾しよう」と話し合ったのが、戸久村の開田と灌漑用水の開削の発端と伝えられています。

※十村役
加賀藩二代藩主前田利常が定めた農政制度「十村制」における役職。地方の豪農(庄屋)に十村という役を与え、いわば現場監督として利用することで、農村全体の監督や徴税等を円滑に行っていた。

先人の意思を未来へ引き継ぐ

戸久用水は、全線が素掘りの土水路で、また山間の斜面を縫ったルートであることから、開設当時は豪雨のたびに用水路が決壊するなど、維持管理に要する労苦は他の村とは比べ物になりませんでした。

昭和40年代には、北陸自動車道の建設工事にもなう用水路の付け替えや、全線でのコンクリート三面張り水路への改修、さらには土砂流入が頻繁な山腹区間での暗渠化により、維持管理が軽減されました。

しかし、近年の異常気象がもたらす豪雨は、山腹の土砂が用水路に流入し通水が阻害されることによる溢水被害のほか、一部の区間では水路からの漏水による谷側斜面の崩壊を招いており、麓の人家に災害を起こす危険性が高まっています。このため、平成29年度からは、防災減災事業による改修が行われています。

先人のためまぬ努力と英知の積み重ねにより守られてきた戸久用水。その意思は、300余年経った今も脈々と受け継がれ、災害の未然防止と安定的な農業用水の確保に向けた取組みはこれからも続きます。



▲昭和の整備事業でコンクリート三面張り水路となった用水路



▲災害を未然に防ぐため古くなった用水路を改修



▲適切に維持管理を行うため水路の状態を確認



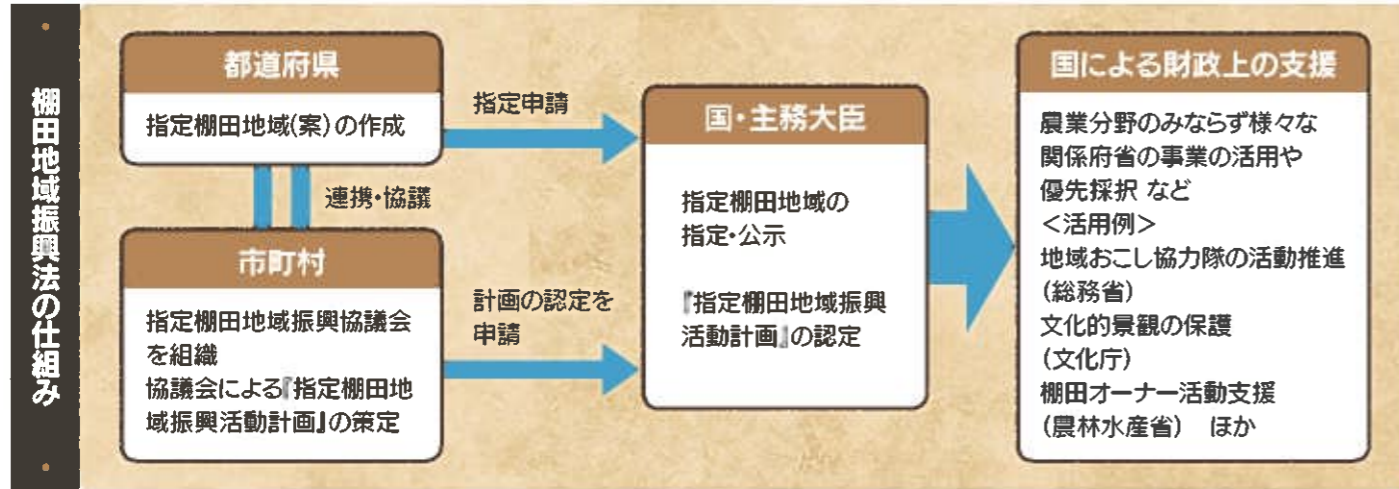
▲開設当時の戸久用水(昭和40年代工事の竣工前より)当時の苦労がうかがわれる

棚田地域振興法の制定

国民的財産である棚田を保全し、多面的機能の維持・増進を図ることで、棚田地域の持続的発展と私たちの生活の安定向上に寄与するため、令和元年6月、『棚田地域振興法』が成立しました。

この法律では、国が「指定棚田地域」に指定し、「指定棚田地域振興活動計画」を認定した棚田地域に対し、振興活動を支援するための必要な財政措置を講じることとされています。

なお、富山県では、令和2年10月までに37地域が指定棚田地域に指定されました。



日本の原風景

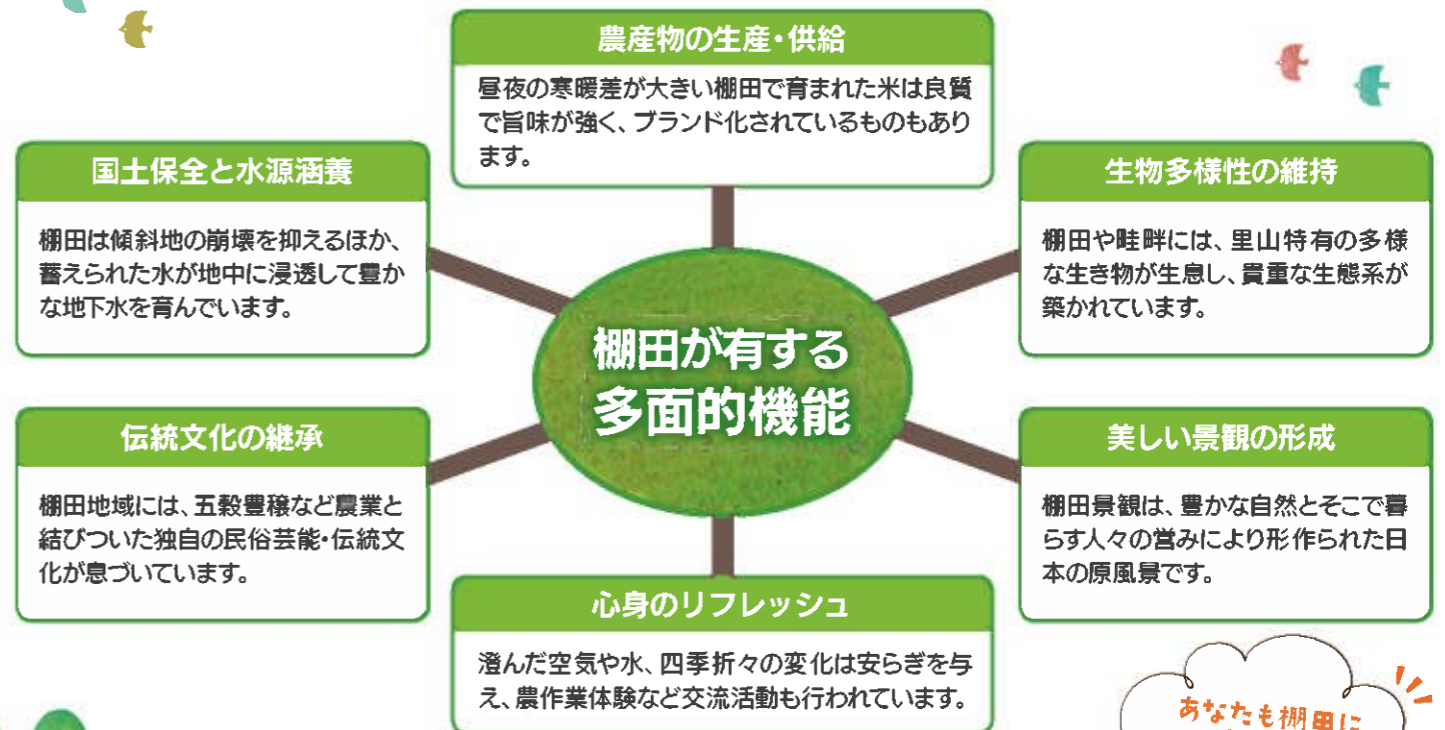
棚田を

未来へ継承するために

棚田がもたらす様々な恵み

棚田には、農作物の生産以外にも様々な役割があります。これらの役割は“多面的機能”といわれ、棚田によって私たちは様々な恩恵を受けているのです。

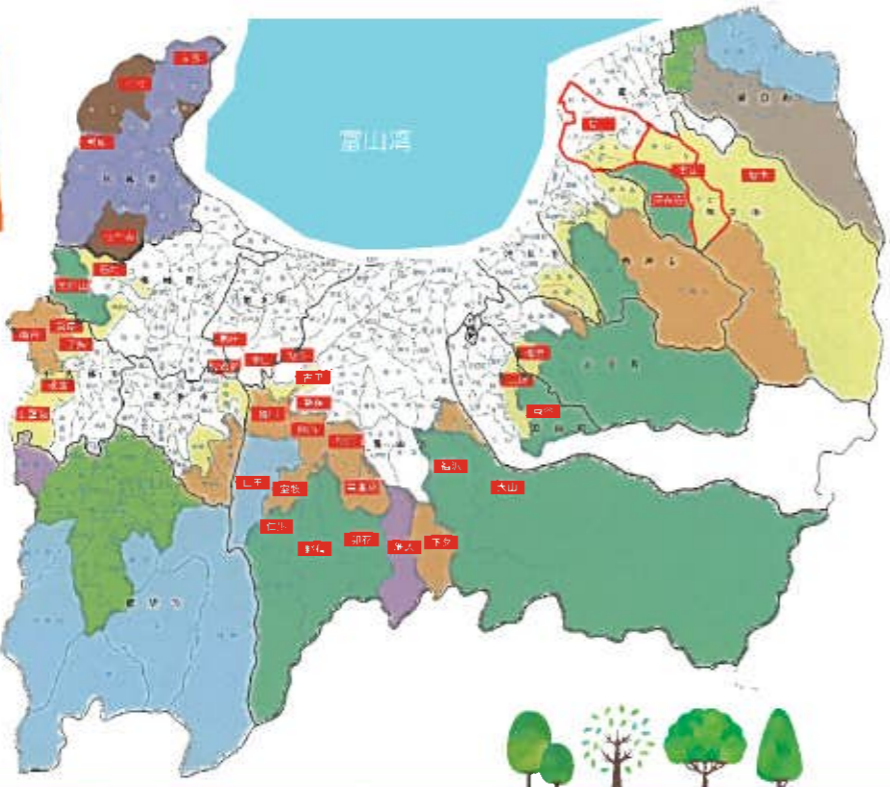
棚田が有する多面的機能



あなたも棚田に出かけてみませんか?

中山間地域のエリアマップ

指定棚田地域 色塗り箇所が中山間地域



棚田カード

棚田地域を盛り上げるため、農林水産省の主導で全国の棚田を紹介するカードを作成。県内からは棚田百選の「長坂の棚田」と「二乗の棚田」のカードが発行されています。

とやまの農山村写真展
農山村の素晴らしさを広く知ってもらうため毎年開催。美しい棚田景観やそこに暮らす人々の様子を切り取った作品が数多く寄せられています。

とやま棚田 ネットワーク

県内の棚田に関する情報交換や棚田を守る取組みを支援する組織で、入会は自由(無料)。会員になると棚田保全活動や棚田オーナー等の情報が得られます。



棚田オーナー制度

都市住民等が会費を払い棚田オーナーとなって、農家の指導のもと農作業を行い、割り当て区画で収穫されたお米等がオーナーに贈られる制度。県内では、氷見市長坂や南砺市平地域(相倉集落)などで実施されています。



日本の棚田百選

農林水産省が1999年に選定。県内からは、氷見市の「長坂の棚田」と富山市八尾町の「二乗の棚田」が選ばれています。

棚田豆情報

中山間地域の再生は住民の手で



中山間地農業再生支援事業

地域の将来像を描く

目指すのは、農業などの再生による中山間地域の持続的発展。そのために住民が話し合いを重ねながら地域の将来像を描きロードマップ作りを進めますが、そのプロセスで大学など外部の知見を活用するのがこの事業の特徴です。

第1回ワークショップには、論田・熊無両地域から約50名が参加。相模女子大学の九里徳泰教授がファシリテーター（※）を務め、都市部の若者の視点を生かすため、ゼミ生たちも参加。自由闊達に意見を交わし、地域の課題や長所を見つめ直しました。



進行役の相模女子大学九里教授



熱気溢れるワークショップ

中山間地域が直面する様々な課題に対応するためには、住民自らがそれらの解決方策について考え、行動を起こすことが重要です。県では、地域の主体的な取り組みを促そうと、令和元年度に「中山間地農業再生支援事業」を創設。最初のモデル地域となったのが、人口約600人の山間の集落、氷見市の論田・熊無地域です。

『見える化』で意識を共有

地域の現在と未来を可視化できれば、住民が地域の課題を「自分事」として捉えやすくなるため、大学等の協力を得て「集落点検」を実施。土地の利用状況や各世帯の年齢構成を地図上に『見える化』することで、何もしなければ将来地域はこうなるのかについて認識を新たにしました。

課題の掘り下げと方策の検討

複数のワークショップで課題を絞り込んだ結果、「農業再生」と「移住・定住促進」の2つの分野で踏み込んだ議論を行うことになりました。

「農業再生」分野では、特産品として大人気の「草もち」に着目。原料のヨモギと新大正もちは、他地域からの買入れ等ではなく100%地域内生産を目指すことになったほか、他のもち加工品にも手を広げたいといった意見も出されました。また、食用ほおずきについても、栽培拡大や加工品開発も視野に入れることになりました。



東京農大高畑准教授のペピーノ栽培指導



ペピーノの実



九里ゼミの学生が食用ほおずきのジャムを試作

食用ほおずき



相模女子大学の学園祭で大盛況の論田・熊無ブース

- (※) ファシリテーター／話し合いの場で、発言・論点の整理、円滑な進行により合意形成に導く人
- (※) ペピーノ／南米産のナス科の野菜で、主にデザートとして食される
- (※) はさがけ米／木材などを組んだ「はさ」に稲束をかけ、天日干しにした米

アクション

「移住・定住」分野では、まず地域の魅力を発信していきこうと相模女子大の学生と連携し、論田・熊無地区のホームページの制作を開始。また、国の重要文化財「藤箕（ふじみ）」の製造技術伝承に携わる地域おこし協力隊員を募集することにしたほか、交流人口を増やすため、独自に認定した地域文化財を巡って楽しむウォーキングイベントの企画や、空き家の活用法の検討等も行いました。

東京農大の高畑准教授から提案された「ペピーノ（※）」の栽培にも挑戦。既に21名が試験栽培を開始し、新たな特産品化が期待されます。また、相模女子大学の学園祭には「はさがけ米（※）」や草もち等を持ち込んで販売し、たちまち完売。都市圏での高いニーズに自信を深めました。

持続可能な中山間地域を目指して

都市圏における新型コロナウイルスの感染拡大により、都市在住の若年層を中心に地方への関心が高まっています。こうした状況を農山村の住民が前向きに捉え、多様で魅力ある地域資源を生かせるよう知恵を絞らなければなりません。論田・熊無地区で始まった様々な取り組みが、本県の中山間地域活性化のロールモデルとなることが期待されます。

第10回「とやまの農山村写真展」



受賞作品

「とやまの農山村写真展」は、富山県の豊かな農山村風景を後世に守り伝えることを目的に開催。作品を応募される方はもちろん写真展をご覧いただく方々にとっても農山村の魅力を再発見する良いきっかけとなっています。

今回は321点(一般178作品、ジュニア143作品)の応募があり、その中から富山県知事賞(最優秀賞、優秀賞)、富山県土地改良事業団体連合会長賞(棚田賞)及びとやま棚田ネットワーク会長賞(特別賞)を選定・表彰しましたので紹介します。

最優秀賞



一般部門

「星降る夜に」水野 敬雄 (富山市)



ジュニア部門

「川幅がちがう五分水路」堀田 駿 (上山市)

優秀賞

一般部門

「新米、いただきます!」戸田 美香 (富山市)



一般部門

「美しい田園」杉山 邦雄 (高岡市)

ジュニア部門

「帰ろう」戸田 智咲 (富山市)



棚田賞

一般部門 細川 潤
若林 清和

ジュニア部門 黒田 唯心

特別賞

一般部門 小川 圭二
谷崎 悦夫
田中 明子
林 謙宗
河合 寛

ジュニア部門 谷川 杏奈
滝澤 真花
東 唯斗
明瀬 雛乃
大川 凌生



受賞作品は「とやま棚田ネットワーク」のホームページでご覧いただけます。とやま棚田ネットワーク

塾生募集!

とやま帰農塾 2021



Welcome to KINOJYUKU

田舎暮らしや移住・定住に関心のある方、農林漁業を体験してみたい方
富山の農山村で自然と歴史、農業と食文化を学び合い、
体験しませんか?



高岡市 国吉塾



9/18日~19日
酪農体験、竹林整備と竹細工

水見市 灘浦塾



8/27日~29日
自然農の夏野菜収穫、鮮魚さばき

黒部市 黒部塾



6/12日~13日
巻江(昔の用水路)整備、梅酒・梅シロップづくり

朝日町 笹川塾



6/4日~6日
山菜採り、イワナ釣り

南砺市 井波塾



10/29日~31日
里芋掘り、麻布織り

南砺市 五箇山なま畑塾



8/24日~26日
なま畑の火入れ

富山市 ながたん塾



10/15日~17日
循環型無農薬/有機栽培の農作業

富山市 やまだ村塾



11/20日~22日
旬の冬野菜収穫、そば打ち

立山町 立山塾



10/22日~24日
陶芸体験、和紙づくり

参加費
2泊3日 一般 20,000円 学生 12,000円
1泊2日 一般 11,100円 学生 6,800円

ご家族・ご友人同士で、
お誘い合わせの上ご参加ください!

令和3年度の各塾のスケジュールは、HPをご覧ください。

お申込み・お問い合わせ

グリーンツーリズムとやま
TEL: 076-482-3181 FAX: 076-482-3635
(E-mail) info@gt-toyama.net

富山県農村振興課
TEL: 076-444-3380

とやま帰農塾

今号の表紙を飾るのは、高岡市で牧場「clover farm」を営む青沼光さんご家族です。青沼さんは広島市出身。中学の時にテレビ番組で見た酪農の放牧風景に憧れ、両親を説得して自宅から遠く離れた農業高校に進んだ後、経営や法律、流通など幅広い知識を得るため新潟大学農学部に進学。酪農における後継者不足の原因は、酪農家と消費者との「距離感」にあると考えた青沼さんは、北海道のような巨大生産地ではなく消費者に近い牧場に関わろうと、長野県の牧場で第三者継承(※)の後継者候補として2年間経験を積みました。

その後、黒部市の「新川育成牧場(現・くろべ牧場まきばの風)」の研修生となり、そこで出会った佳奈さんと結婚。長男の誕生をきっかけに「自らの牧場を持って家族で経営したい」という思いが強まり、離農する高岡市の酪農家から敷地や乳用牛を買取るかたちで、2015年にclover farmを開業しました。当初7頭だった飼養頭数も今では85頭となり、搾りたての生乳を組合に出荷するほか、ジェラート専門店「戸出ジェラート」やパン・イタリア料理店「noche」(いずれも高岡市)にも新鮮な原料を提供。また、酪農をもっと身近に感じてもらうと、就業体験の受け入れや酪農を通じて命の大切さを学ぶ酪農教育ファーム活動などにも取り組んでいます。

さて、牧場名にもあるクローバーは幸せの象徴で、牛の大好きな牧草。青沼さんは、酪農を始めるまでに会った人々に感謝し、酪農を通じて社会に幸せをお返ししたいという思いのもと、これからも酪農を守り、その素晴らしさを伝え続けていきます。

※第三者継承:農家の施設など有形資産やノウハウなど無形資産を家族以外の者に受け渡して経営を継承する手法



青沼光さん

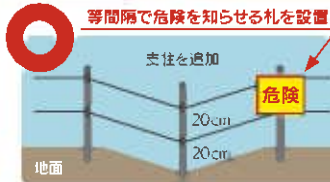
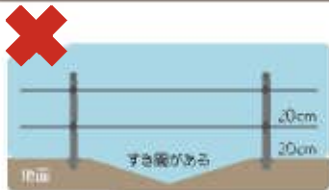
Clover farm
クローバーファーム

〒933-0962 富山県高岡市佐加野東190
TEL.0766-53-5404 / FAX.0766-53-5404
<http://clover-farm.blogspot.jp/>
(E-mail) happydairycoops.cloverfarm@gmail.com
●平成27年/毎日農業記録賞・一般部門「最優秀賞・新規就農大賞」受賞
●平成30年/全農酪農経営発表会 優秀特別賞 受賞

地域ぐるみでイノシシ等野生鳥獣の侵入防止対策の徹底を!

あなたの地域の柵、正しく設置されていますか?

冬期間は電線、支柱を撤去しましょう。
ただし、除雪等に影響がなければ電線のみ撤去でも可。



イノシシ等野生鳥獣による農作物被害を未然に防止するため**8月1日**の前後1週間 で電気柵等の侵入防止柵を集落ぐるみで点検しましょう!
ご不明な点は富山県農林水産部農村振興課までお問い合わせください。

□本誌に関するご要望、ご意見等をお寄せください。住所、氏名、年齢、職業のご記入をお忘れなく。個人情報については、内容確認以外に使用いたしません。
□本誌の内容が富山県ホームページでもご覧になれます。<http://www.pref.toyama.jp/>

第42号 令和3年3月

この付刊は、富山県農林水産部農村振興課と、関川地域水と土壌基金とで発行されています。

編集・発行

富山県 富山県農林水産部農村振興課

T930-0004 富山市桜橋通り5番13号 富山興銀ビル4階
TEL 076-444-3380 FAX 076-444-4427
とやま関川ネットワーク <https://www.tym-midori.net/tanada/tanada.htm>

協力



水と土のネットワーク 富山

T939-8214 富山市黒崎17番地
TEL 076-424-8800 読 FAX 076-424-3382
<http://www.tym-midori.net/tomidoren>

この冊子は1年半を1冊用いています。